

日本

ハンザキ研究所 ニュース 2007(6):通巻17号

発行 2007.06.30

〒679-3341兵庫県朝来市生野町黒川 292

TEL/FAX (079)679-2939

E-mail: J-hanken @ sasayuri-net.jp

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

オオサンショウウオの幼生・未成体

の生活の場は？

オオサンショウウオの夜間調査を実施していても、なかなか小さい個体を発見することは有りません。鯢口（人口？）の底辺を支える数は膨大な物があってはじめて種が維持される事になります。本種の生残率は分かりませんが、例えば1個体のメスが1シーズンに500卵産み、これを10年間続けるとして5,000卵が産み出されます。この中から2個体が大きくなって繁殖をすれば、全体数のバランスがとれるということになります。これを20年間生き続けると考えると1万分の2という気の遠くなるような生き残り方しか出来ないことになります。餌取りの不器用なオオサンショウウオは遊泳力の大きな魚類を捕食することよりも、同じ行動レベルに存在するサワガニや仲間を捕らえるほうが楽なはずで、と言うことで共食いによる減耗もかなりの割合になるものと考えています。

秋の繁殖シーズンから数か月過ぎた、翌年の1～5月にかけて産卵巣から幼生たちは川の中へと分散していきます。4～5才の真っ黒な弱々しい体の幼生が餌（水生昆虫）を捕らえるのも大変ですが、より大型の動物たち（カメ・イモリ・魚など）の餌になってしまう個体も多いでしょうし、餌にめぐり合えず餓死してしまう幼生も多いものと思います。昼間に時間の余裕があれば、川の底に溜まっている落ち葉の塊やめくった石の下から幼生を見つけることがあります。落ち葉の中には沢山の水生昆虫が身を潜めつつ葉を食べて生きていますし、石の下面にも色々な種類の虫が住み着いています。オオサンショウウオの子供たちも危険な川の中へ出て捕食されるよりも、虫と同じく体を隠しつつ餌の採りやすい所に生きているのです。調査を初めた頃にはこんな事も分からずに偶然の結果を積み重ねてきて、今では容易に見当が付くようになりました。そして、その一か所の発見数が多ければ多いほど近い所に繁殖の場の存在が推測できます。

今年の5月にはハンザキ橋下の黒主の巣から旅立ったと思われる幼生を多数確認しました。飼育中の幼生の餌として水生昆虫を採集する時に発見しているのです。これらの0才幼生は比較的容易に確認できるようになりましたが、それ以上の4～5才までの幼生や全長30才以下の未成体を確認するのは難しい状況です。河底の礫中が生活の場と考えられるのですが、河底の石を全て引っくり返せば分かる事でしょうね。

オオサンショウウオ“安口ルート”を求めて(7) — ハダカス、安口他 NPO 法人 地域再生研究センター会員 日本ハンザキ研究所 研究員 池上 優一

やっと表題の件について触れられる段階になりました。このことが述べたいがために、オオサンショウウオのいろいろな呼び名をたどってきた訳なのです。

ことの発端は、谷川健一著「続 日本の地名」(1998 岩波新書)を何となくめくっていた時、第二章「先祖としての動物」に『[サンショウウオ] 安口(はだかす)』という項目に引き付けられたことからです。そこには、次のように書かれていました。

「兵庫県多紀郡篠山町(旧多紀町)に安口と書いてハダカスと読む地名がある。篠山地方の方言で、山椒魚のことをハダカスまたはアンゴウと呼んだ。はじめは安口と書いてアンゴウと訓んでいたが、ハダカスが一般的になってきて、安口と書いてハダカスと訓むようになったのであろうか、と落合重信は述べている(『兵庫の地名再考』)。岡山県英田郡西粟倉村影石の道路から吉野川に出たところにハダカス岩がある。むかし、平景清が放った山椒魚がいるというので、この名がある(『総合日本民族語置』)。・・・」

時まさに、栃本所長が「日本ハンザキ研究所」を立ち上げられ、地域・行政・NPOと協働で、朝来市生野町黒川に「あんこう・ミュージアム」を創り、地域の活性化を目指そうという活動及び研究所の支援をスタートしたばかりでありました。

オオサンショウウオに関する「あらゆるもの」を集めておられる所長に、監修をお願いし、関係文献をお借りする一方、図書館通いや現地訪問を行いつつ調査を始めました。そして、岡山県の西粟倉村と兵庫県の安口で、オオサンショウウオのことを「ハダカス」と呼ぶことから、どちらからか伝わったものであると仮定し、方言伝承のルートも調べられないかと思ったところから、表題のテーマで調査を発展継続しつつ、まとめの途中段階をこの紙面をお借りして発表している次第です。歴史、本草、東洋医学、水産、方言等々の分野にも関係するので、調べる過程で新たな疑問が次々と出てきましたが、幸いにインターネット等での情報収集も可能であり、古典籍は思った以上に資料収集でき、現地への訪問や聞き取りも一度は実施できました。

何と言っても、オオサンショウウオのことを何故「ハダカス」と呼ぶのか、ということが一番の疑問でした。そのため、岡山県西粟倉村の教育委員会から、聞き取りを始めました。その結果、この地域(西粟倉村周辺)では多くの方が日頃からハダカスと言っていることはわかったのですが、何故そう言うのかは皆目解かりませんでした。そこで、郷土史家の山根政雄氏を紹介していただきました。氏は地域の歴史や史跡に詳しく、特に平影清のことは大変よく調べられておられ、平影清とハダカスとの関係については、出典などを教えていただきましたが、何故そう呼ぶのかという点は不明でした。

続いて、篠山市の安口を訪れました。最初に、篠山市の教育委員会を訪れ、文化財担当の植木主事から、奥田楽々斉著の「多紀郷土史考」(昭和33年)のコピーをいただき、また郷土史家の中野卓郎氏を紹介いただきました。引き続き篠山市多紀支所を訪れ、関口支所長にお会いし、安口(はだかす)という地名の謂れについての資料をご紹介いただきました。お願いしたところ、篠山市で頂いたものと同じ資料を示されました。

そこには、「・・・また、安口(はだかす)は、余程念の入った村名である。これは此辺は鮫鱈の棲息が多かった為に出来たと思う。どちらも魚片を取って安康とし、尚康の字を口に略したものである。そして、これを「ハダカス」と読ましているのは、鮫鱈には肌に着の如きものがあるので、かく呼んだのである。他国の人はここを「ヤスクチ」というのであって、これをはだかすとは云わない。」と書かれてありました。求めていたものに遭遇し、久しぶりに大変な感動を覚えました。

多紀支所では、篠山の森公園の樋口園長を紹介していただき、後日訪れました。樋口氏には、安口(はだかす)集落の安口岩(あんこういわ)を案内していただき、地元の郷土史家の梅田四郎氏を紹介いただきました。ところで、昭和13年6月刊の「兵庫県博物学会誌」第15号には、多紀郡城北小学校の樋口繁一氏(樋口氏の実父)「丹波・安口村名の起り」と題する論文を發表しており、そこには次のように書かれてあります。

「丹波篠山の東方3里、多紀郡福住村に安口と言う部落がある。安口と書いてハダカスと呼んで居る。・・・福住村は京都、大阪、兵庫三府懸の堺を接する処で4周山に囲まれ中を加古川の上流即ち篠山川が細く流れてゐる。この安口村は特に奮幕府時代篠山領に非ずして、京都府の亀岡領であったので京都との関係が深い。京都府の堺に(ミヤマ)と云う深い森林の山がある。之の山奥から年中水の枯れたことのない谷川流れ出てゐる。この谷川(安口川)が篠山川の上流と合するところ淵をなして居る。この淵を今もアンコ淵と呼んでゐるが、ここから上へ数丁登ると川の中にアンコ岩がある。この間に多数ハンザキが生棲して居たのである。(篠山地方ではハンザキの事をアンコと呼ぶ)

傳説に依ると、昔帝都(京都)に在りし頃、或るみかど御病に罹り給ふ。陰陽師にトせし給へば、アンコウを奉らば御病癒えんと申しければ、使して丹波のアンコウ岩の下より大なるハンザキを奉る。之れよりアンコウ村(安口村)と名づくとか。安口(鮫鱈の字を用いし事もある)と云いしに、いつとは無し又の名ハダカスと呼ぶ様になり、文字は安口と書き訓はハダカスと云う。」とあり、さらに阿部附記として「・・・今ひとつハダカスは阿部の推察では其の皮膚粗糙である為と解してよからう、といふのはハンザキに更にサンショウウオの名があり、それが皮膚粗糙山椒の樹のやうだとの意味であるからである。・・・」

節用集や本草書の中のハダカス記載を探すと、室町時代の「黒本本節用」には、鮫の文字にハダカスのカナ、鮫鱈の文字にアンカウのカナをふり「有足魚也」と解説があります。鎌倉以降の「運歩色葉集」や「伊京集」に、鮫鱈にアンガ(カ)ウのカナ、膾膾臍(オットセイのこと)という漢字にハダ(タ)カスとウンナンサイの二つのカナをふっています。ちなみに、前出の「続日本の地名」には、サンショウウオをウンナンソウ、ウナギをウンナンという東北地方の方言にも触れています。

最近の「九頭竜川流域誌」(国土交通省福井河川国道事務所 2001)の(第1編 第5章 6.川漁)に、「・・・かつては、ヤナやエバといった漁法で、アユのほかアマゴやイワナなどを獲っていた。・・・このヤナでは、落アユ、ゴリンボ(アジメ)、ビシ、ハタカス等を獲った。・・・」と記されています。ハダ(タ)カスという呼び名は、オオサンショウウオ以外にもあったようで、今後さらに調べたいと思っています。(続く)

モリアオガエルのいい加減な産卵 ②

昨年の産卵状況や今年の産卵開始については、当ニュースで触れてきました。一般には池などの水溜まりの上に突き出した枝に、白い泡状の卵塊を産みつける季節の話題としてもよく知られています。しかし、ハンザキ研におけるこの2シーズンだけのことですが、このイメージはかなり改めねばならないのではないかと思います。当ニュースNo.4・5でも述べたように、水気のない玄関の階段下やプールのオーバーフローの水平なコンクリートの上、オタマジャクシが水中ではなく陸上に落下してしまうような枝で産卵するのはどうしたことでしょうか？ このようなモリアオガエルの繁殖生態を見せつけられると、今までの教科書は書き換えねばならないのではないかと思います。一体彼らは何を考えているのでしょうか？

今シーズンも又、幾つかのたため産卵を見ることになりました。水田ではなく畑の畝における卵塊2つはオタマの運命がすでに極まっているでしょう。普段は水の流れない排水溝での産卵やコンクリート上の産卵など全く世話の焼ける話です。金網ですくい取ったりして水上にセットしたり、もがいているオタマに水を流して水中へ移動させたりと、なんでこんなにいい加減なのかと呆れるほどです。池の上にカットした枝を差しかけておいたら産卵しました。周辺の産卵状況を見ても樹上よりも地上の卵塊の方が圧倒的に多いというのはどうしてなのでしょう？ 今年のハンザキ研の池やプールでの産卵は昨年のような集中型ではなく散発的に行われています。昨年と何処が違うのか分からないのですが散発的な孵化の場合には、次々と食害に遇っているようでオタマの姿がほとんど見当たりません。池中が真っ黒になっていた昨年とは大違いな状況です。夜のラブコールの騒音に近い鳴き声も散発的で寂しいかぎりです。

モリアオガエルのオタマの天敵と言われているイモリを昨年は60個体位を川へ池のオーバーフローを通じて移動させました。今年は6月28日現在 105個体にのぼっています。池の中以外の路上を匍匐している例も多々観察しました。一体彼らはどのようにして水の存在やオタマの生産の場を察知することが出来るのでしょうか？ 数平方メートルの小池の再現をいち早く知っての集合には感心させられるのみです。間もなくイモリの引っ越しは終わるのでしょうが、今年のモリアオのオタマの生き残りは如何ばかりのものになるのでしょうか興味のある所です。

しかし、その一方で私が池への導水を十年程のブランク後に再開したことやイモリの人為的な移動などこれも生態系の攪乱の範疇に入っているのではないかと反省もさせられています。とかくヒトの存在が反自然という状況をつくり出してしまうことになり、本当の自然環境の保全ということは難しいことだと実感させられている所です。ヒトにとっての利益・不利益にのみに視点を当てると、大きな自然破壊に繋がりがかねないことになると思います。陸の赤潮生物である我々ヒト種の行動規範はどうあるべきなのでしょう？



写真1 日本工科専門学校生のミズバショウ湿地除草作業



写真2 観察ステーションの冠水状況



写真4 コンクリートの上でもがくモリアオのオタマ



写真3 和亀保護の会・西堀代表がハンザキを手取りに



写真5 篠山市安口(はだかす)のバス停



写真6 安口集落等の遠望(京都府との境界、天引峠は鉄塔辺り)

ハンザキ研日誌 2007年6月

- 1日：大阪府北部農と緑の総合事務所（三宅・栗栖両氏）ウエスコ（河東氏）来所
2日：日本工科専門学校・都市工学科生6名来所、ミズバシヨウ湿地草取り等
3日：キタイ設計・柿木氏来所
4日：京大院・田口氏来所
5日：市川・竹原野地区の事前調査～8日約80個体確認、新規20個体程、総計で
130個体にマイクロチップが挿入されたことになる
7日：八鹿土木事務所のトライヤル・ウィーク生4名来所、大西・山本両氏引率
8日：朝来市奥銀谷小・3年生8名来所、教頭先生・山崎先生引率
9日：上流の黒川ダムから放水が行われ、ステーションの巢の上まで水が来た（初）
11日：養父市建屋地区まちづくり研究会7名来所
：校舎北側の鹿防除ネット完成、家庭菜園にトライ（トマト・シュンギクなど）
12日：支流とも言いがたい溝で全長245mのオオサンショウウオ未成体保護
15日：午後來所・GS-240（239は5月28日姫路水族館チーム実施）
17日：和亀保護の会・西堀代表他3名来所、イシガメ調査中にオオサンショウウオを
1個体手取りしてチェック
18日：禁漁区の許可・市川漁協（学校に接する範囲）環境学習用として
：ハンザキ研究所ニュースNo.16刊行（5月分）やっと追いついた
19日：水槽セット（60号2、90号1）
20日：但馬地域教育長会にて「廃校活用について」講演、朝来市埋蔵文化センター
21日：ケーブル・テレビとインターネット導入の申請
23日：京大2年・前田知己君2回目の夜間調査、京大院・田口氏と6個体チェック
：ケーブル・テレビの工事、インターネットもOKとなる。
25日：共和コンクリート姫路営業所・木元所長他、自慢の「スズカケ」持参しセット
27日：豊岡土木事務所・出石川のオオサンショウウオ対策委員会の打合せに来所
28日：滋賀県立大浦部先生と卒論の馬場さんがオオサンショウウオの寄生虫調査に
29日：午後退所・GS-240終了
30日：NPO法人地域再生研究センター総会

今月は2回27日間の出勤？で、来訪者を含めて総計113人の利用がありました。

2005年8月の開所以来では56回300日、総計1,713人となりました。

ハンザキ所長のツブヤ記録

今回はツブヤのためのスペースがほとんどなくなりました。この2行だけでは発信したいことが十分に記せません。順調な整備状況であり満足している事だけをお伝えします。